

『狂歌木廼花日記草稿』

——解説と翻刻——

服 部 仁

解 説

明治五年三月五日から二十三日にかけて、旧尾張（明治二年名古屋藩、同四年名古屋県、同五年愛知県）愛知郡古渡町（現在名古屋市中区）の狂歌師至一園美観が、年来尊崇する摂津国能勢郡野間の庄（現在大阪府豊能郡能勢町野間中六六一）の日蓮宗霊場能勢妙見山へ参詣した狂歌紀行文『狂歌木廼花日記草稿』を紹介する。

著者至一園美観について、『狂歌人名辞書』（狩野快庵編、昭和三年刊、昭和五十二年復刊）によれば、「初号橘の門直成、通称岡部佐太郎、尾張名古屋古渡の人。（通称録）」という人。以下、本書に登場する人名を列挙し、その人物について本書より分かることを記す。また『狂歌人名辞書』により判明する者は、※を付してその記述を引用する。▽は服部の注記。

・尾崎獅子麿（二一ウ） ※牡丹園獅子丸、別号琵琶の門、又裂帛喰社、通称尾崎弥三兵衛、京都衣棚二条に住す、嘉永頃の判者。▽本書に記載されていることから、明治五年までは存命。

・中根時碍（四オ） 大津在の狂歌師。

・堀田梅溪（六オ） 京都の狂歌師。内舎人カ。

・中尾遊山（七ウ） 内舎人。

・音川定静（七ウ） 内舎人。

・橘庵田鶴麿（一六ウ） ※芦辺田鶴丸、三蔵楼、又橘庵と号す、通称岩田次郎兵衛、字は可蘭、尾張名古屋の染工、後ち僧となる、橘洲に学び酔竹側判者たり、天保六年十月三日播磨沖にて溺死す、年七十七。▽本書の、「鹿ヶ谷なる安楽寺に至りて、橘庵田鶴麿が塚にまうで、追悼にとて」という記述により、初世田鶴丸の墓の所在が明らかとなった。それは、美観もこれに続けて記しているように、松虫姫鈴虫姫出家という出来事で著名な安楽寺（御住職伊藤正順師、京都市左京区鹿ヶ谷御所ノ段町二一）に現存していた。ただし寺域整備がなされたため、墓の位置は元々の場所ではない。なお『狂歌人名辞書』の記述は、部分的に訂正が必要だと思われる。これについては、別稿を記す所存である。

・上井筒（一八ウ）（店名カ）

・熊谷直信（一八ウ）

・はやし善八（一九オ） 元名古屋藩の弓役。明治五年当時、京都で蕎麦屋を営む。

・梶原伊八（一九才）

・仙景園（二二才） 京都の狂歌師。

・森岡桂麻呂（二二才） 京都の狂歌師。

・帰方亭駒彦（二二才） 京都の狂歌師。

・右園左（二二才） 京都の狂歌師。

・吞舟斎（二二才） ※夜半亭吞舟、通称笹山元吉、京都烏丸御池の人、文政頃。▽『狂歌人名辞書』に立項されている人物の一、二世後人か。

・三蔵楼一具大徳（二三才） ▽二世田鶴丸（石川了氏御示教）。

なお、「鈎村なる蓮台精舎」は、滋賀県栗太郡栗東町下鈎七八四にあった天台宗の蓮台寺のことと思われるが、現在は廃寺となっていた。

著者美観は、往路は中山道を取り京都へ行き、京都で旧交をを暖めた後、丹波経由で能勢の妙見宮へ参詣し、帰路は、神戸、大阪の新開地を眺めながら京都へ戻り、京都で再び遊覧をしている。博覧会を見学し、都踊りを楽しみ、晴天を待って東海道で尾張の古渡へ戻っている。ただし、復路はどこか「帰心矢のごとし」という雰囲気が漂っているのが、微笑ましい。

本書について特記すべきことは、まず、先に注記したように田鶴丸の墓所が明らかになったこと。

二つ目に、米原から大津への渡ししが蒸気船になっていたり、神戸や大阪に異国人がやって来たり、異国人街がで

きたりしている様子、つまり開国した日本に、外来の文明が浸透していった様子が活写されていること。

三つ目に、二つ目の延長でもあるが、明治五年に京都で開かれた博覧会の状況が窺えること。

四つ目に、当時の京都における月並み狂歌会の様子が描かれていること。

五つ目に、明治になって武士の商法ではあるものの、尾張藩士が京都で蕎麦屋を開業し、幸いなことに結構繁盛しているという、当時の風俗が描かれていること、等々であろう。

書 誌

編成…写本 大本 仮綴一卷一冊 二三・六×一六・七纏

表紙…素紙

外題…「狂歌木廼花日記草稿」(表紙中央に打付け書、「草稿」は後補)

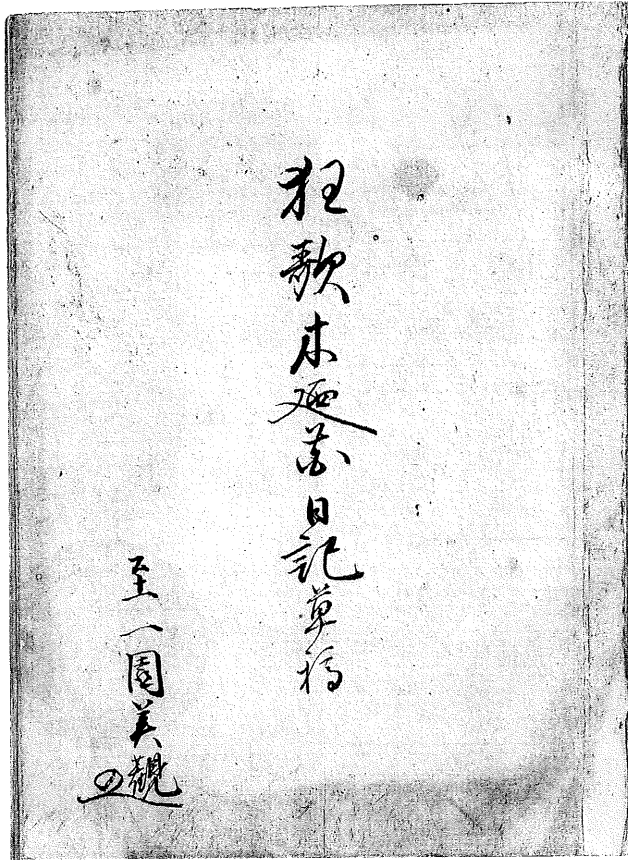
字高…一九・二纏

丁数…墨付き二五丁、遊紙後一丁、全二六丁

行数…九行

翻刻にあたって、婆↓ば、鳧↓けり、とし、濁点、中黒、読点を私に施した。また二〇オゝ二一ウにかけての句点

は原文のまま。また原本は著者自筆稿本であろうと思われる。そして本文中に、著者自身の推敲が朱と墨でなされているが、推敲後の本文を翻字した。



表紙

攝津の國能勢郡野間の名郡、妙見宮と
こゝを流るる信濃川、さながら後をささひいら
ひて京都の花をそそぎ、ついで明治の
五十年と十年に、浮世のうらやま郡のそと
花あふあふ、藤を敷き、ふしのささげあふあ、
かゝるは、いへば西條を、おぼゆる、あつた、あつた、
あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
萩原の雛も、あつた、あつた、あつた、あつた、
あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、

播州赤穂郡の花岳寺の山を懐き
義士の書籍とてんく
或るのわたりは水差とていふは
東山の所とてあつて海と谷郡と安樂寺とあり
橋倉田橋倉の堀とていふは
とて経舟とていふは
人々好むとていふは道とていふは向東とていふは
これとて松虫とていふはの塚あり
まじりぬるていふは松虫とていふは神とていふは

海らち村と大の字田を以て

大の字はあまの字の字にひきつらるる松のむらと

浪岡字もその如き字を以て法和院と名

禁裏御所と侍所と

松の字は念おの松を以て名をなすとも松のむらと

九條屋の字は茶店朝の宿を以て名をなす他の

むらも是並く都鄙のむらと名をなす

後とらわぬむらなるもの

後とらわぬむらなるもの

翻 刻

狂歌木廼花日記草稿

至一園美観

(表紙)

撰津国能勢郡野間の庄なる妙見宮は、としごろわが信ずるところなれば、こたび都の花見がてらにもものしつるは、
明治の五とせといふ年の弥生のはじめ五日なりけり、

花故に出たつ旅は散すべき風のたよりもなさぬ也けり

かくうたひて家路を出つるハ、子刻ばかりになむ、

家路をばいでゝいなばの里まではまだ夜のうちに來つる也けり

萩原の駅にて夜あけたれば、しばし憩ふ、

ほのぐと明ゆくかたに匂ふなりまだ若萌の萩原の里

(一才)

おこしの駅あたりハ、機織る家あまたありて、織女のうたひものなどきこゆ、門辺に桜うゑたるかたもありて、

花うるはしく咲たり、

はた織めいかに見るらむあさひさす軒端あやとる花の錦を

起川をわたるとき、

いかばかり昨ふの雨の降つらむ流れするとき水のしら波

墨股の川辺に桜一もと花さけり、木陰に茶店ありて、いと風雅なれば、しばしやすみて、

桜木を雇ひ柱もおもしろし花をもとの岸の掛茶屋

野上の里なる班女が塚の辺に花萼あまた咲たればよめる、

すみれ草匂ふ野上の一夜妻ひとよ寐まくと思ふころ哉

申の時ばかり関が原につきて蛭子屋といへるにやどりをもとめて、

都へといそぐころのせきが原はやくも来るけふの道かな

六日曇卯過るころ、やどりをいで、車返しの坂にて花をミて、

いにしへの不破の関路の桜はな風もあらさぬ盛也けり

不破の関山にて都なる尾崎獅子鷹にあひてしばしかたらふ、

ころあひの友に逢けり不破の関やれびさしとて語る也けり

柏原なる亀屋左京が家にやすむ、伊吹もぐさをひさぐ大家にて店におほひなる福助をすゑたり、

膽吹山ふもとの里のさしも艸さしも大きなミせの福助

醒井の清水のもとにて、

都辺へいそぐころの駒とめてしばし水かふ醒井の里

ゆくての林に雨呼ぶ蛙あまた啼なり、

こゝかしこ雨呼ぶ蛙こゝろせよ降ばミヤこの花やあせなん

牛打村といふ所を過るに雨降出たれば、米原より夜舟に乗んことを思ひて、道をいそぐ、

九重のミヤこの花やいかならん旅の小笠もあるゝ春雨

午の時過るころ米原のうまやにつく、雨なを止ねば藤屋といへるにやどりて、明日は蒸気船にのらんことなどあ

るじにたのみ置て、うち臥ぬ、

つきぐに夢ばかり見てやすくも寐られぬ宿の樛の木枕

若草ハかゝるをりにや生ぬらむ寐よげに夜たゞ春雨の降

(二才)

七日なを雨降れり、寅半刻ばかり蒸気船に乗る、卯の刻過るころ、船いだせり、空晴雨やみて湖辺のけしきかく

もあざやかに見わたされて、入江に群あそぶ鶴のたちあがるありさまなど、おもしろし、

筑摩野の入江に遊ぶ鍋鶴もかさなる山に群れてゆくミゆ

湖辺眺望をよめる、

のどかなる春も桜にしろたへの雪こそつもれ比良の遠山

鳩の海のどけきはるハさく花の波こそかつげ沖津島山

はる雨の晴ゆくさへにうれしきをさやかにミつる八の名所

(二才)

巳の刻ばかり大津につく。高観音の花ざかりといへるにまかせてまかる、
はるの日のながらの山の山ざくらいかにのどけく咲出にけん

湖上を望て、

さやかにみかゞミの山は見えながら霞にこもる月出が崎

中根時碍が庵をとぶらひて、

道いそぐ旅うぐひすも言のはの花さく宿ハとわで過めや

かへし

中根時碍

うぐひすよ一夜ハやどれ九重の都の花にこゝろせくとも

(四才)

酒肴出してねもごろに饗応す、能勢へ行べき日並あればいなミて別れを告る、
引とむる霞の袖もはる風にたち別れゆく逢坂の関

走り井の店にて、

よそに名のはしり井の水それよりも世に流れたる餅ひめでたし

追分を過ればひだりに牛の尾山ミゆ、

車曳くおほ津を来れば花咲てまだらにミゆる牛の尾の山

蹴上ヶにて、

馬車ひとのゆきゝもやゝしげし都ちかくに今ハなりけむ

遍照の住給ひにし花山村の元慶寺にまかりて、花山の法皇の御影を拜ミ奉りて、

そのかミの君が言葉の跡たれて世にこそ匂へ花の山寺

花山稲荷のミまへにて、

わがやどの拘へ女も花山の花やまあれどいのる神垣

歌の中山を過るに鶯の声をきゝてよめる、

うぐひすの声のしらべもたゞならず名もしき島の歌の中山

清閑寺なる高倉帝の御陵を拜ミ奉るに、(五才) 新に御造宮なりて、御愛樹の楓さへも御ほとりに植させ給ふ、

うつしうゑて今もむかしにかへる手の一木や君が記念なるらむ

清水に花のちるを見て、

音羽山滝のしら糸くりかへし見るまにちれる花桜かな

清水の舞台を飛んで散花も七日こもりしのちにやあるらむ

地主権現の桜をミて、

音羽山ちる花のミとおもひしを地主の桜ぞ今盛なる

四条五条の河原に桜を植並べて茶店あるハ、貸席などあまたありて賑はふありさまを、(五ウ) 橋上より望て、

音のせぬ波のよするとミえつるハうつし植たる桜なりけり

うつしうゑし河原のさくらわすれては波のよするとおもひける哉

陸奥の塩がま桜うつしうゑて六条河原今も賑はふ

申の半刻ごろ堀田梅溪が庵につく、あるじは公用ありて、五六日前より山鼻村なる出張所において居合せず、家刀自、「こよひは下河原の夜さくら見むはいかに」といへるに、「さらばおのれもともにまからん」とて、出行に、梅の尾のあたりより、(六オ)桜を植並べて、都女のたちまふありさまなど、いはんかたなき風情ありて、目驚くばかりおもしろし、

天少女あそぶとやミむこの廓の花ハうきよの外のしら雲

ゑりひしてもいふ花もミえつるハあたら桜の тогоの尾の店
更るまで夜を昼にして花をミン明日寐て昼を夜にハなすとも

丑の刻ばかり梅溪が家に歸りて臥ぬ、雨降出たり、

八日、雨降なれど、つとめて山鼻へまかりて、梅溪が(六ウ)出張所にもせんと、辰半に立いで、今出川なる柳茶屋にしばしいこふ、

おほかたのこゝろなびきて柳茶屋こゝにいこはぬ人なかりけり

御祖の太神に詣で、

ふるさとと旅のゆくてかふた葉竹かけてぞいのる加茂の神垣

梅溪が出張所、山鼻村園部といへるハ、高野川の河添にして、いと広やかなる料理茶屋なり、前栽に桜山吹さき

ミちて風情ある庭なり、流れにそへる別荘四ヶ所ありて、いづれも（七才）ミやびをむねと造り出たり、川のむかひにハ、松がさきを見わたしていはんかたなきながめなり、梅溪をはじめ、中尾遊山、音川定静といへる内舎人もつどひ来りて、所がら鮮かなる魚を出して、家刀自をはじめ女ども酒をすゝむる、はた所の名物なりとて、とろゝ汁など、ことに風味よろし、

高野川さかまく水も立よへりよどめば匂ふ山吹のはな

さく花に枝うちかわす松が崎みどりめでたき春の山はな

山ばなや高野の川のはる雨にぬれても匂ふ鶯のこゑ

（七ウ）

高野川ちりて流るゝ花故に水のうへにもゆくこゝろかな

おもふどち打かたらひて山ばなにやまぬハ酒と雨となりけり

顔のミハあかめあふともおもふどちむつむハ酒の円居也けり

音川が家より鱸のあつものを贈り来したるに、

山はなの山のいも汁すゑ終にうなぎとなりし春雨の宿

詩仙堂は程近ければ、まからんハいかにと定静・遊山のいへるにて、うち連て一乗寺村へまかりて、詩仙堂に至

りてこれかれ庭のけしきども見るニ（八才）丈山翁の好ミおかれしおもかけ、むかしを思ひいづるばかりなり、

今年は翁の遠忌なりとて、追悼の歌帖一卷いだして、あるじの尼僧の歌よめと進むるに、

ぬけがけの後ハうき世を夢と見て蟬の小川もわたらざるらむ

はた翁のいしぶミを見て、

にぎりなき御代にしあれば今も名は清くながる、石川の水

からうたにおもひよせても物の部のこゝろハおなじやまとだましひ

西半刻ばかり、詩仙堂をいで、八坂新地丹米楼までおくり来つれば、例の酒ほがひして四人ともそのまゝ（八ウ）
酔ふしぬ、

花曇り目のうへおもし過しつる酒の名残のはなの明ぼの

九日晴、卯半ころ、ミたりの友どちにわかれを告て御池瓦なる神泉苑に至る、この所ハそのかみ小町が雨祈りた
るよしなれば、おのれもまた善女竜王の池のほとりにて、

ふるさとかへらんまでハ心して雨なふらしそわだつミの神

西の京妙心寺などをへて双が岡にて、

松ばかりならびが岡とおもひしを桜さへこそさかり也けれ

（九才）

仁和寺の花、真盛なり、本尊薬師如来の開帳ありて、人々のつどひ来てうたひさゞめくありさま、実に都の美景
とやいひつべし、

さまぐゝの人のこゝろの花をさへ桜にそへてミつるけふかな

祇王寺、往生院など過る二、行手のかたに雉子のなくこゑきこゆ、
なくきゞす汝もうきよの嵯峨の奥かすみぐれの妻や尋ぬる

愛宕詣の人々、櫛を持って帰るにあまた行に逢ふ、
家づとに折もつひとのこゝろこそ櫛が原の嵐なるらむ

(九ウ)

小倉山二尊院にて、

小倉山ふもとの花よこゝろあらばミゆきとちるな風さそふとも

大堰川にいたりて嵐山をミれば、花ハ盛過たり、

ちるやとて見にや来つらむあらし山風のふく日も人のつどへる
かならずよちぎりおかねば桜ばなわが見ぬまにもうつろひにけり

扇ながしにて、

おもはざる風のすさびにとりおとす扇ながしをまさにみるかな

渡月橋より大堰川を望て、

おほる川井せきによどむしら波ハ嵐の山の桜なりけり

大堰川かぜをたのまぬいかだにもちりこそつもれ花のしら雪

おほる河水にうきゞの筏士をミれば丹波の亀山の人

法輪寺の開帳に人のゆきかふさまを見て、

桜ばなちりかひ曇る春の日ハ道もさりあへず人つどふ也

松尾の社に詣でけるに、御垣の桜盛なり、

(二〇オ)

御かゞみにうつろふ花のちりのミはミえてさやけきの玉垣

衣手の森にて、

きてミむとおもふ人こそおほからめ花の錦のころも手の森

たちぬわぬ花の錦の八重ひとへかさねて見ゆる衣手の森

老の坂越、

のぼるにもこゞしき老の坂道ハ若きも杖をたのみ也けり

丹波の亀山を過て、法貴谷越の麓にやどりをもとめけるに、夕告る鳥の声きこえていと心ぼそし、
をりにあへばあはれをしらぬ声もなをかなしき旅の夕がらすかな

十日天気よし、朝とくやどりをいで、法貴越を登る、

あへぎつゝまたぎのぼればさきだちて谷の戸わたる鶯のこゑ

小路といへる山路に鶯あまた囀れり、

うぐひすの啼たび毎にたゝずみて道はかどらぬ春の山ふみ

妙見山の半途にて、

鶯のなく音めでつゝのぼるまにまことの法の声ぞ聞ゆる

ミまへにまうでゝ、

安く世を守り給へとぬかづきてゆくすゑいのる外なかりけり

坂口なる多田屋何がしの軒端に桜あまたあれど、蒼有て花未開、
都にはちりにしかたもありしかど咲もいそがぬ山ざくらかな

またれてもいそがぬ花の枝にこそこのだけき春のこゝろをぞみる

吉川の里に下りて、しばしやすむ、多田の桜はいかにとあるじにとへど、しらざるよしを答ふ、

吉川やよしやさくらハちりぬともいさやまうでむ多田のミやしろ

多田川、

にごりなき水の源まつミえてながれもきよき多田の川波

多田院の花盛なり、

弓矢守る神のミまへのさくら花うれしや鳥も枝をミだす（「さ」の誤カ）ず

ゆく手に山に梨の花あまた咲たり、

ものもひもなしの花さく山来れば家路のうさもわすれはてつ、

池田を過るに、桃のはやしあまたあり、

ものいはぬ桃の岡なん口なしの色に花さく菜畑にして

崑陽の池のほとりより、伊丹を望て、

仙人の汲といふてふはる霞ながるゝかたや伊丹なるらむ

旅人の立よるたびに菅笠の月もやどかるこやの池水

(二一ウ)

(二二オ)

武庫川の渡に舟まちして、

武庫川のむかひの岸にとくわたせまつまもながき春の夕暮

日暮ければ、広田のやしろを遙かに拝奉りて、西の半刻ばかり、西の宮駅角屋某にやどる、

(一二ウ)

十一日、朝とく立いで、西の宮に詣ず、

九重のミヤこのにしの宮ばしらふとしくたてる神ハこの神

芦屋の里にて、雲雀の囀りあがるを見て、

武庫山ハかすみにこめてのどかにも芦屋のさとにひばり啼也

菜の花をいで、たち舞ふあげ雲雀こがね造りの鈴やならせる

雀松原の旧跡にて、

あと、へば里のをの子も旧事をよくも囀るすゞめ松原

数馬の浦より摩耶山を望て、

ミほとけのなり出まし、おもかげに霞も降るまやの山寺

(二三オ)

滝の寺より布引の滝にいたりて、

くりかへし、くてもミつるかな布引はへし滝のしら糸

陸奥のけふのさと人いかにミむ布引はふる滝の広さを

このごろの雨に水かさやまさりけん一巾ひろき布引の滝

生田川、

いく年をいく田の川にことゝはむかばかり波の皺のよりぬと

生田の森にてえびらの梅を、

梅の花ちりにしのちもものゝふの名のミかをれる森の朝風

楠公のミやしろハ御造営半出来せり、

(一二ウ)

たち花ハ花副ミさへなりいでゝいやとことばにさかえます神

神戸の湊に至りてこゝかしこを見るに、開湊ありしのちはいにしへのおもかげはさらにもなくて、異国の人々の

家居あまた建ならべて市をなす、都鄙の商人もこゝにつどひ来たりて、おほかたならぬ繁栄の大湊なり、

富さかえちまた賑はし湊には千万国の船つどふ也

皇国も千万国も交はりてあそぶ御代こそ御世にハありけれ

蒸気船にて浪華津へわたらむとて、全羅号と(一四オ)いへるに行て、海竜丸といふにのりて湊をいづるハ、午

過るころなり、

大ふねにのるとみしまにかすみつゝはるかになりぬ和田の笠松

黒船ハ武庫山おろしさをふともゆだのたゆたに海わたるなり

ミをつくしそれと見るまに乗こしてはやも跡べにうちかすミつゝ

船のはやければ、未の刻ばかり、浪花の津、外国寮のほとりにつく、

いとはやも着くハこの世のたから船また七ふくも葺のまぬに

親和橋のあたりは、異国造りの家あまた軒を並（一四ウ）べて、外つ国の人もまるひなして市をなす、

一と国のこゝちせられて難波津ハさらに皇国とおもはれぬかな

松島の新廓ハ、浪花の廓々の妓女をこゝにうつして、あらたに花街となりつるよし、ちまたに桜うゑつらねて、

めさましままで花麗なり、歌舞妓の芝居など、初舞台を開くよしにて、殊二賑はし、

十がへりの花さかせんと根こし来てうつしうゑたる松島のさと

粧ひして並ぶ姉葉の松しまやおほかた年も十八の公

けふは神武帝の御祭典の御日柄とて、難波の（一五オ）大御城のミうちへ平民の見物をゆるされたり、おのれも

入てみる二過つる辰年の春、炎上して、むかしの面影もミえず、

玉造り玉のいらかも夢見草夢とちりたるいしずゑの跡

高麗はし

から国はいさしら波のうへにしもかけわたしたるくるがねの橋

八軒屋より淀まで船をたのミて、

さらばとて乗込む春のよど川や時も八字の八軒家ぶね

難波津を乗いで、ミれば淀川の柳にかすむはるの夜の月

宮あけてミれば柳のひまもれて月も眠れるよどの川舟

（一五ウ）

よどまでといひてよどまで乗来れば淀にてあがるよどの川ふね

十二日、卯過るころ淀につく、この所より横大路を過て、下の鳥羽にてやすむ、

山城の鳥羽の田の面の水鏡あさきよめして蛙なく也

こひ塚の恋の重荷ハつミながら曳もなづまぬ鳥羽の大牛

弘法大師の開帳ありときゝて、東寺にまかりて、

高野山その暁もまたずしてかゝるミスがたふしおがむかな

兩本願寺の開帳を拜ミテ、梅溪のやどりに至る、

十三日、雨降り、午の時ころより檀王へまかりて、(一六才)播州赤穂なる花岳寺の出開帳にまかりて、義士の書籍を見て、

武士のかきながしたる水荃を手にとりミれば袖ぞぬれける

東山の所々をめぐりて、鹿ヶ谷なる安楽寺に至りて、橘庵田鶴磨が塚にまうでゝ、追悼にとて集め置たる短冊どもを納めて、

人ミなのことばのはなハ備へしに手向たらはぬ心ちこそすれ

この寺に、松虫すゞむしの塚あり、

すゞむしのふるごときけば我さへに音を啼ばかり袖ぞ露けき

浄土寺村より大の字山を望て、

大の字ハしらぬ春へのひがし山みどりもえたつ松のむら立

銀閣寺より真如堂、黒谷を過て、清和院口より禁裏御所を拜奉りて、

桜ばなこずゑあらはに荒はて、ミヤこも今ははるのふるさと

九条殿の前栽に、茶店またハ貸座舗など池のほとりに建並べて、都鄙の人々こゝにつどひて遊ぶ、実に往昔の面影なくて見る人涙をこぼさぬハなかりけり、
(二七才)

明日ハまた明日のけしきにうつるらむけふハきのふの夢の面かけ

十四日、天気よし、けふハ知恩院、建仁寺、西本願寺の三ヶ所なる博覧会にもものしけるに、から大和ハいはず、万の国々なる品々、ふるきもあらたなるも飾たて、目驚くばかり也、外つ国人もむれ来て、これを愛づること、おほかたならず、

かけまくもかしこきミ世ハ居ながらに千万国の宝をぞ見る

よしあしの品さだめしてからやまと人の市なす所也けり

十五日、曇なり、午過るころより、六角堂、仏光寺（一七ウ）あたりの開帳ニまうで、寺の名の仏は光はなちけり弥陀ハ無量の箔斗かは

大仏にて、

草むらとあれにしのは春毎に仏の座のミ生ひにけるかな

十六日、雨いたくふれるに、北野の森に行て、

かへがたの天に満ぬる神ならばとく吹はらへ四方の雨雲
花ちればなれものうくなくやとて聞に北野の森のうぐひす

崇徳帝を勸請ありし白峯の宮二まうで、

深ミどり常盤がきはに千万代さかえゆくらむ杉山の神

(二八才)

一条戻り橋のほとりにいこふまに、雨やミたり、

ふりつゞく雨も日和にもどり橋よミがへりたる空の色かな

空はれ雨やミぬれば、三本樹なる上井筒といへるハ、年ごろねもごろなれば、ゆきてあるじに逢ふに、酒肴いだ
してもてなす、おのれもたわれて遊ぶ、

うたげしてあそぶ都の三本樹月雪花のながめのミかは

十七日、雨ふれり、午過るころより四条なる新誓願寺といへる所二ものして、浪華の俄狂言を見る、熊谷直信も
来りてともにあぞぶ、蕎麦の(一八ウ)あつものをとりよせてもてなす、

津の国の難波わざをぎ山城の鳥羽画の如くいとあざれたり

熊谷が馳走も須磨のすだれ盛あつもりにせし蕎麦のもてなし

蕎麦ハ、このごろ名古屋より新店を開きたるよしにて、味はひ殊に勝れたり、かへさに立よらむハいかにといへ
るに、おのれもともにたちよるに、元名古屋藩の弓役はやし善八といへる人にて、なりわひことに繁昌也、
山鳥の尾張仕込のうどんやはながくつゞける店の人あし

十八日、けふも雨やまず、川東なる梶原伊八が三回忌（一九才）なりとて、梅溪夫婦出行ぬ、留主をまもりていでず、

十九日、曇、午過るころより、八坂新地なる都をどり見んとて、梅溪夫婦と共にうちつれて、富永町の丹米楼にまかりて例の酒ほがひして、踊の時刻をまつ、此廓のきゝもの玉屋井上のあるじもらひ来て遊ぶ、家のあるじも帰りきたりて、ともにものせんとなり、踊の場所は新橋にて、広やかにうるはしき席なり、博覧会のうちハ、外つ国人も（一九ウ）こゝに來りて遊興すると也、見物、人の波をなせり、舞子一組三拾貳人、地方式拾壹人にて、いづれも別品にて、目をおどろかす風情なり、

都踊の文 十二調

神風のとゞく地球のすみぐ／＼までも。わけて都ハあきらけく。治る歳の五ッめハ。いよむつまじく七重八重。けふ九重にさく花の。弥生を開くはじめにて。十重はたへとも群競ふ。名にし八坂のまが玉そろへ色うるはしき朝霞。あつきなさけに薄化粧。何の（二〇才）かはらむかはらばいやよ。たまのおいでのこと国人に。光かゞやく初日の出。見せてす顔のすんがりしやんと。すゑの／＼までとげきる契りか。なかにやさしきおほこハつぼミ。ふくむ笑顔に愛もつ枝を。かざし並べて東方亜細亜。おほ日の本とゆふべから。祇の園生に遊ぶ夜を。花にあしたをわすれてや。くめどもつきぬめでたき御世の。あらたにすゝむ酒機げん。よいや洋洲あしもとさへもよろよろめきし欧羅巴。空ものどかや天地の。亜米利（二〇ウ）かたまる日和ぐせ。くもらぬ御世の花曇。すこしハぬれて亜米利加も。香に匂ふなる花吹雪。人の山見る博覧会。おすなくオーストラリア澳大利亜。いづれもおそろいおめでたい。

みがくちしきの魁に。その支那かたちゆるくと。ゆたかにならふひとをどり。はやしそろへて。十二律あはす調子ハ御国振。ひかる一越上ニ無てふ神仙・盤渉・鸞鏡てふ。黄鐘・鳧鐘とつゞけるは。双調・下無・勝絶てふ。拍子そろへてヒイト、リ。かんハ平調・断金調。花を望なら祇園町。なさけハ八坂(二一才)新地ぶり。御国ミやげ京ミやげ。めつたにひけば鳥が啼あづま男にまだまけぬ。花の都の京女郎。ひとよに千代のかづかさね。もの数いはぬいろハその。花山吹の花の数。柳さくらの実とじつ。まことくらへハ花競べ。色より香より真実を。洗ひあげたる水上ハ。清きながれを汲バナを。水ももらさぬ花屏風。かぜもとほさぬ玉の緒を。きみのながめに

雪月花

茅野山ちもとの桜何かせん花をくらぶる妹がよそほひ

(二一ウ)

さくらなき異国人やおどろかむ都をどりの花の粧ひ

廿日、けふもまだ雨降れるにつけて、仙景園の翁をとぶらふニ、幸ひ月並のつどひなればこなたへといへるにまかせて歌場に通り返るに、森岡桂麻呂に帰方亭駒彦の翁、右園左などをはじめ、都の狂歌よみあまたつどひ居たり、当座詠の最中なれば、おのれも題を得て、吞舟斎老翁の撰なる羈中余花といへるを、

咲残る花にこゝろをなくさめつ旅をう月とかこちながらも

(二二才)

春にしもそれてかへる駅路にわれにみよとや花の残れる

人々のよみ出たる名所恋といへるを、おのれによさわるさをえりてよとあるに、いなみがたくて爪印をなしたるすゑに、

花のさくちぎりもなくて年ハ経ぬ初瀬の松原三輪の杉村

廿一日、空晴あざやかなれば、都をたちて家路に帰らんといへば、梅溪夫婦も門辺まで送りて、別れを告て道を
いそぐ、大津にて、

さゞ波の大津の浜にうちいで、ミればさやけき大比叡の山

(二三ウ)

小鮪杖といへるより船に乗て矢橋につく、鉤村なる蓮台精舎にゆきて、三蔵楼一具大徳之墓所にまうで、
よみいで、まつなき魂をなぐさめん妙なる法の花の言のは

おもひいで、今はたぬらす袂かな君が言葉の花の下露

平の松山うつくし、松をよめる、

名にしおふ美し松はみどり濃しく世ふれどもとこ少女にて

申過るころ、土山なる山田屋某にやどりをもとむるに、伊勢詣、あるハ京参りの人々つどひたれば、裏なる川添
の別荘に案内す、
(二三オ)

石ばしる滝つながれの旅やどり枕の下にかじか啼也

廿二日、まだきより雨降出て止べくもミえねば、やどりをいで、田村の社にまうで、

鈴鹿山田村の宮のおさめ額鬼とりひしく歌のミぞある

蟹が坂にて、

春雨にひたぬれにけりすゞか山蟹が坂道横降のして

猪の鼻の茶店にやすむ、

舟ばりの猪の鼻までの一ふりハかへりミさへもならぬ大雨

つれぐと雨のふる日ハ我ことにものうかるねにうぐひすも啼

(二三ウ)

峠の名物善裁餅の店にいこふ、

立よりていさとゞめてんはる雨に道もしるこのせんぎるの店

鈴鹿の坂あたりハ、大木の杉、のこりなく伐はらひたり、

鈴鹿川ミがさせざりてきりおとす杉より古く流れけるかな

関の追分にやすみて行かふ人をミて、

神まうで仏まうでのわいだめをはかりて見る関の追分

亀山の駅はしに通日雇の宿ありて、門辺に居風呂を立たり、そのほとりに雲助のよりそふさまを見て、

居風呂の前から尻をあぶりこの雲も背をやく亀山の宿

(二四オ)

この駅にやどかるべきを、雨大降なれば、明日ハ和泉川のわたりなど水かさの増らんことをおもひわづらひて、
道をいそぎて、申過るころ石薬師の駅にやどる、雨なをやまず、

廿三日、天気よし、

のどかにもやどりたらまし旅の空行手も春の日ながなれ、ば

四日市に来つれば、「出舟あり、とく乗れ」とすゝむれども、風あらければのらず、苗代の神社を遙拝して、

尋ねれば蛙なくなる山陰の小田の中なり苗代の宮

(二四ウ)

桑名につきて、春日の社にまうでけるに、前ヶ浜の舟人來たりて、「森津なる藤見がてらに、出ふねあれば、とく乗」と、すゝむるまゝに、浜辺にゆきて、

春日なる神にゆかりの藤の花いざみにゆかむまたき舟だせ

森津の藤のもとにて、

紫の藤の花ぶさうち見には造りものかとおもひけるよな

うちよする波のうへにもなびく也風にミだるゝ藤の花ぶさ

尺取虫、枝を這ふ、

枝をはふ尺とりむしよ去年ことしいづらハながき藤の花そも

(二五オ)

平島のわたりを過て、馬ヶ地、押萩などうち過て、熱田新田に來るころ夕暮つぐる鐘のおときこゆ、鐘の音もうれしくなりぬ我宿にちかづくけふの夕ばかりハ

酉の半ごろ我宿所に歸りて、

ながめ來し都の花ハちりはてゝ夢のさめたる心ちこそすれ

(二五ウ)